

## 聖学院の英語

### 聖学院で学ぶ英語

英語は、世界に数ある言語のうちの1つに過ぎません。従って、英語ができるから特別な人間になるものでもありません。しかし、英語という言語は、現代社会の中において重要なコミュニケーションツールとして不動の地位を占めています。事実、英語が出来ると、基本的にどこの国にでも留学できますし、世界に散らばる友人とコミュニケーションが可能となります。以上のような認識を持ちつつ、英語を単なる受験のツールとしてではなく、可能性を広げるツールとして、未知の世界への窓として学ぶ気持ちを持つことが大切です。

### 聖学院の英語学習過程

聖学院の英語科は英語学習を次の3つのステージに分けています。まず第1に、「英語と日本語の違いに気づく」ことです。これはどういうことかという、英語と日本語では語順が違いますし、文法も違います。このような言語の形態的・統語的違いに「気づく」ことを第1ステージの目標とします。期間としては中学の英語でここに重点を置きます。第2に、「英語で様々な情報をインプットする」ことです。ここのステージでは多読読解に力を入れます。文法を一通り終えた段階でこのステージに入り、高校2年生の終わりまで続けます。最後に第3ステージは、「英語を使って自分の思いを発信する」ことです。ここでは高校2年生の授業を中心に、文章を書き、発表することやディベートをすることに力を入れます。

### 英語学習理論に基づく教育

さらに、聖学院の英語科は「英語学習」を包括的に捉えます。つまり、学習は授業内だけで完結するものではありません。放課後の学習や家庭での学習も立派な英語学習です。具体的には、授業は「記憶の定着を図る仕組み」を大切にします。特に多重知性理論に基づき、学習内容を読んだり、見たり、聞いたり様々な側面からアプローチし、理解の促進と記憶の定着を図ります。さらに、英語科は構成主義の教育観を大切に、生徒が実際に手を動かし、学ぶ課程を大切にします。また授業外では、「継続可能な自律学習の仕組み」を提案します。これについては、宿題の目標や課題に取り組む意味を明記したハンドブックが基本となります。授業ノートや課題などを定期的に提出することで、生活のリズムをつくり、学校の授業と家庭学習が結びつくようになります。つまり、学校と家庭での学習を大切にすることが英語学習を成功させる鍵なのです。

### 聖学院の英語科が望むこと

最後に、聖学院の英語科は、「英語を現代社会の重要なコミュニケーションツール」と定義しています。繰り返しますが、英語能力は生徒たちを特別な人間にするものではありません。また、単なる大学受験の科目でもありません。英語は世界へとつながる扉のようなものです。英語を使えば世界中の人々とコミュニケーションをとることができます。私たち英語科の教員は聖学院の生徒たちが「Only one for Others」というキリスト教精神に立ち、英語という道具を使い、世界で活躍することを願っております。